

2008 大学入試センター追試験問題 数学Ⅱ・数学B (60 分)

第 1 問 (必答問題) (配点 30)

[1] a は実数とする. x の方程式

$$(2^x + 3^x) \left(\frac{9}{2^x} + \frac{4}{3^x} \right) = a \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

について考える.

(1) $X = \left(\frac{3}{2}\right)^x$ とおけば, 方程式①は X を用いて

$$\boxed{\text{ア}} X + \frac{\boxed{\text{イ}}}{X} + \boxed{\text{ウエ}} = a \quad \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

となる.

方程式②が異なる二つの正の解をもつのは

$$a > \boxed{\text{オカ}}$$

のときである. このとき, 方程式①は異なる二つの解をもち, それらの和は $\boxed{\text{キク}}$ であることがわかる.

(2) $a = 50$ とする. 方程式②の解は

$$X = \boxed{\text{ケ}}, \frac{\boxed{\text{コ}}}{\boxed{\text{サ}}}$$

であるから, 方程式①の解は

$$x = \frac{\boxed{\text{シ}}}{\log_2 3 - \boxed{\text{ス}}}, \frac{\boxed{\text{セソ}} \log_2 3}{\log_2 3 - \boxed{\text{ス}}}$$

となる.

[2] 座標平面上の原点 O を中心とする半径 a の円周上に異なる 2 点 $A(a, 0)$ および P をとり, $\angle OPA = \alpha$, $\angle POA = \beta$, $PA = b$ とおく. ただし, $0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$, $0 < \beta < \pi$ とする. また

$$L = \frac{2}{a} \cos^2 \frac{\alpha}{2} + \frac{1}{b} \cos^2 \frac{\beta}{2}$$

とおく.

(1) 実数 θ に対し

$$\cos^2 \frac{\theta}{2} = \frac{\boxed{\text{タ}} + \cos \theta}{\boxed{\text{チ}}}$$

が成り立つから

$$L = \frac{1}{2ab} \left(a + \boxed{\text{ツ}} b + \boxed{\text{テト}} \cos \alpha + \boxed{\text{ナ}} \cos \beta \right)$$

となり

$$L = \frac{\left(\boxed{\text{ニ}} a + b \right)^{\boxed{\text{ヌ}}}}{\boxed{\text{ネ}} a^{\boxed{\text{ノ}}}} b$$

と表される.

(2) a と b が $\boxed{\text{ニ}} a + b = 1$ を満たしながら動くとする. このとき, L の最小値を求めるには, $\boxed{\text{ネ}} a^{\boxed{\text{ノ}}}$ の最大値を求めればよい. したがって, L は $a = \frac{\boxed{\text{ハ}}}{\boxed{\text{ヒ}}}$ のとき, 最小値 $\frac{\boxed{\text{フヘ}}}{\boxed{\text{ホ}}}$ をとる.

第2問 (必答問題) (配点 30)

k を正の実数とし、座標平面上に点 $P(1, k)$ をとる。また、放物線 $y = \frac{1}{2}x^2 - 1$ を C とする。

(1) 点 $\left(t, \frac{1}{2}t^2 - 1\right)$ における C の接線 l の方程式は $y = tx - \frac{\text{ア}}{\text{イ}}t^2 - 1$ である。また、

点 $\left(t, \frac{1}{2}t^2 - 1\right)$ を通り、接線 l に垂直な直線 m の方程式は

$$\text{ウ}x + \text{エ}ty = t\text{オ}$$

である。直線 m が点 P を通るような t の値の個数を求めよう。

直線 m が点 P を通るとき、 t は方程式

$$t\text{オ} - \text{カ}kt - \text{キ} = 0$$

を満たす。この方程式の左辺を $f(t)$ と表すとき、関数 $f(t)$ は

$$t = -\frac{\sqrt{\text{ク}}k}{\text{ケ}} \text{ のとき、極大値 } \frac{\text{コ}\sqrt{\text{サ}}}{\text{シ}} k\sqrt{k} - \text{ス}$$

$$t = \frac{\sqrt{\text{ク}}k}{\text{ケ}} \text{ のとき、極小値 } -\frac{\text{コ}\sqrt{\text{サ}}}{\text{シ}} k\sqrt{k} - \text{ス}$$

をとる。これより、直線 m が点 P を通るような t の値の個数について

$$0 < k < \frac{\text{セ}}{\text{ソ}} \text{ のとき } \text{タ} \text{ 個, } \frac{\text{セ}}{\text{ソ}} < k \text{ のとき } \text{チ} \text{ 個}$$

であることがわかる。

(2) $k = \frac{\text{セ}}{\text{ソ}}$ のとき、方程式 $f(t) = 0$ の解は $t = \text{ツテ}$, ト である。

$t = \text{ツテ}$, ト に対応する直線 m を、それぞれ m_1 , m_2 とする。

m_1 と放物線 C の二つの交点のうち、 x 座標が ツテ と異なる点を Q とすると、 Q の x 座標は ナ である。同様に、 m_2 と C の二つの交点のうち、 x 座標が ト と異なる点を R とすると、 R の x 座標は ニヌ である。このとき、二つの線分 PQ , PR および C で囲まれた図形の面積は ネノ である。

第3問 (選択問題) (配点 20)

数列 $\{a_n\}$ を

$$a_1 = 3, a_{n+1} = -2a_n + 8 \quad (n = 1, 2, 3, \dots)$$

で定める.

(1) 数列 $\{a_n\}$ の一般項を求めると

$$a_n = \frac{\left(\boxed{\text{アイ}}\right)^{n-1} + \boxed{\text{ウ}}}{\boxed{\text{エ}}}$$

である. したがって, 自然数 n に対し $S_n = \sum_{k=1}^n a_k$ とおけば

$$S_n = \frac{-\left(\boxed{\text{オカ}}\right)^n + \boxed{\text{キク}}n + \boxed{\text{ケ}}}{\boxed{\text{コ}}}$$

である.

(2) 自然数 n に対して $T_n = \sum_{k=1}^n |a_k|$ とおく.

$a_n = 0$ となるのは $n = \boxed{\text{サ}}$ のときであり, このとき $T_{\boxed{\text{サ}}} = \boxed{\text{シ}}$ である.

また, $n > \boxed{\text{サ}}$ のとき

$$|a_n| = \frac{\boxed{\text{ス}}^{n-1} + \boxed{\text{ウ}} \cdot \left(\boxed{\text{セソ}}\right)^{n-1}}{\boxed{\text{エ}}}$$

と表すことができる. これより, $n > \boxed{\text{サ}}$ かつ n が奇数ならば

$$T_n = \frac{\boxed{\text{タ}}^n + \boxed{\text{チツ}}}{\boxed{\text{テ}}}$$

であり, $n > \boxed{\text{サ}}$ かつ n が偶数ならば

$$T_n = \frac{\boxed{\text{ト}}^n + \boxed{\text{ナニ}}}{\boxed{\text{ヌ}}}$$

である.

第4問 (選択問題) (配点 20)

平面上に一辺の長さが1である正三角形OPQがある. 直線OQに関してPと対称な点をRとし, 直線OPに関してQと対称な点をSとする. PSを $a:(1-a)$ ($0 < a < 1$)に内分する点をA, ORを $b:(1-b)$ ($0 < b < 1$)に内分する点をBとする. ベクトル \vec{OP} , \vec{OQ} をそれぞれ \vec{p} , \vec{q} とおく.

- (1)
- \vec{OA}
- ,
- \vec{OB}
- を
- \vec{p}
- ,
- \vec{q}
- で表すと

$$\vec{OA} = \vec{p} - \boxed{\text{ア}} \vec{q}$$

$$\vec{OB} = -\boxed{\text{イ}} \vec{p} + \boxed{\text{ウ}} \vec{q}$$

であるから, \vec{AR} と \vec{BQ} は

$$\vec{AR} = -\boxed{\text{エ}} \vec{p} + (\boxed{\text{オ}} + \boxed{\text{カ}}) \vec{q}$$

$$\vec{BQ} = \boxed{\text{キ}} \vec{p} + (\boxed{\text{ク}} - \boxed{\text{ケ}}) \vec{q}$$

となる. ただし, $\boxed{\text{オ}}$ と $\boxed{\text{カ}}$ は解答の順序を問わない. これより

$$\vec{AR} \cdot \vec{BQ} = \frac{1}{\boxed{\text{コ}}} (\boxed{\text{サ}} a - \boxed{\text{シ}} b - ab)$$

である.

- (2) 2直線ARとBQが垂直に交わるとする. このとき,
- b
- は
- a
- を用いて

$$b = \frac{\boxed{\text{ス}} a}{a + \boxed{\text{セ}}}$$

と表される.

さらに $a = \frac{1}{2}$ とすると

$$|\vec{AR}| = \frac{\sqrt{\boxed{\text{ソタ}}}}{\boxed{\text{チ}}}, \quad |\vec{BQ}| = \frac{\sqrt{\boxed{\text{ツテ}}}}{\boxed{\text{ト}}}$$

であり, 四角形ABRQの面積は

$$\frac{\boxed{\text{ナニ}} \sqrt{\boxed{\text{ヌ}}}}{\boxed{\text{ネノ}}}$$

である. また, 2直線ARとBQの交点をCとすると

$$\vec{OC} = \frac{1}{\boxed{\text{ハヒ}}} (-\boxed{\text{フ}} \vec{p} + \boxed{\text{ヘホ}} \vec{q})$$

である.